

平成28年4月8日(金)

老球の細道 226

随所に主となる

会津バスケットボール協会 室井 富仁

『随所作主』とは、いつでも、どこでも、自分の置かれた場所や状況の中で精一杯心を込めて努め励み、相手を最善に生かすこと、そして自分が生かされ光ることを意味する。中国・唐時代の禅僧で臨済宗の開祖、臨済義玄の言葉で、これに続く句もある。「随所作主 立処皆真」(随所に主となれば、立つところ皆真なり)と、そのことに一所懸命になれば、真実がそこに現れているという意味である。

昔から大好きな言葉で、転勤や新しい役職などで自分の置かれる環境が変化する時によく思い出していた。いつでも、どこでも『随所に主となる』ことは容易なことではない。

本物の自分、真実の自己(主人公)という土台がしっかりしていないと、外からの圧力に振り回されてしまい、自分のやりたいことなどできずに周囲に流されて終わってしまう。せっかくの新天地、妥協してしまっただけは何のための心機一転かわからない。

「会うは別れの始めなり。さよならだけが人生さ」。誰かが言っていたが、春はまさにその言葉が身にしみる季節である。25日新聞で「教職員の人事異動」が発表された。教員だった現役時代も今もこれを見るのが楽しみである。普通は新聞を隅から隅まで読むなんていうのはまれであるが、人事異動の号外だけは例外である。赤のマーカーペンを持って隅から隅までじっくり読む。昔の同僚や知り合いの先生、そして教員の教え子たちの動向に印をつけて大勢を把握する。特にバスケットボールに関連した先生方の異動には注意が集中する。今年もバスケット界においてはたくさんの異動があったようである。教員の定めとはいえ部員の生徒や保護者にとってはさぞかし残念なことだろう。

私自身も現役時代6校(講師時代を含めると8校)の異動をした。異動する時の不安と期待感は今でも忘れられない。特に関心事は、バスケットボールはできるだろうか、バスケットボール部にはどのような選手が集まるだろうか。教員はどんな人がいるのだろうか、学校は荒れているのだろうか、クラスは持つのか、授業はちゃんとできるのか等等。

色々な学校を渡り歩いたが、どんなタイプの学校であってもいつも心がけていたのは「随所に主となる」ということであった。ただおかれた環境でおとなしく順応するだけでなく、私にしかできないことを何かする。原町高では学校で初めての「校内合宿」を実施、新地高ではバスケットボール部がなかったので部を創部、喜女高においてはクラス担任を務め日刊「学級通信」の発行、会津高では「アメリカ遠征」実施、坂下高では「トップアスリート」教室開設、葵高校では「大会1週間前の朝練習」解禁等、周囲のパッシングに負けないでなんとか自分を貫き通すことはできた。しかし、全国大会出場は果たせなかった。

新天地に異動する人たちに告ぐ。春だから梅の花が開くのではなく、梅の花が開くから春がやって来る。精進努力している処に春が現れていく。どうか、意にそぐわない転勤や役職の変更があっても、常に「随所に主となる」の心意気を持って、新天地で自分らしさを発揮し、自分にしかできないイベントにチャレンジしてほしい。

【新しい場所で新しいことをやろうとすると最初は必ず反対にあってきた。しかし、新しいことはいつだって無謀で無計画で、前例がなく何の保証もないところからしか生まれてこないものなのだ(鹿子裕文『へろへろ』より)】